

シベリア体験の楽苦書

東京都 神 家 正太郎

シベリアへの旅立ち

大隊長が軍刀を空高く振りかざし「諸君と共に祖国へ帰る」と訓示し、意気軒昂と貨車に乗り込んだのであるが、それはシベリアへの旅立ちであった。大隊長以下全将校がデマに踊らされた悲劇の一コマである。

時計のこと

収容所の門を入るとき身体検査を受けるのだが、ある日監視兵が私の腕時計を見つけて「よこせ」と言う。見ると彼は三個も腕に巻いているではないか。「なぜ四個も必要か」と拒否すると「ラポータニエツト」(働かない)と言う。「スマートリ」(見せろ)と言って調べると、彼はネジを巻くことを知らないのである。私がネジを巻き、針の動かし方を教えてやると「ハラシヨ」(よろしい)と言って立ち去った。

ノルマの不合理と非生産性

◎品質管理

私は抑留期間中、伐採の仕事に従事した。三人一組でノルマは十立方メートルである。当然のことながら、作業能率は機材の良否に左右される。のこぎりの目立てをし、なたの刃を研いで作業にかかるべきであるのに、ロシア人には品質管理の認識がない。刃の丸くなったのこぎりでも、とにかく員数をそろえて貸与すればノルマは達成できるものと信じているようである。我々は、少しでも切れ味のよい道具を手に入れようと血眼になったのである。そして、やすりと砥石の必要性を理解させるのに苦労し、多くの時間を浪費したものである。

ノルマは作業の種類ごとに規定されている。どのような基準で決めるのか知らないが、大工、左官、時計の修理工、絵描きなどの手作業のノルマは緩やかに見えた。彼らは苦労少なくて大きなパンを手にしたが、手に職のない我らのノルマは厳しかった。不公平なノルマに泣いたものである。

◎冬の伐採は雪との戦いである

一・五メートルの積雪をかき分け、木の根元を中心に作業空間を作る。さらに木の倒れる方向から後方四五度の角度に逃げ道を二本作る。根元から四五センチのところのこぎりを入れて切り倒す。これが作業の基本である。しかし、除雪作業の時間と労力はノルマに算入されていない。夏でも冬でもノルマは三人一組で十立方メートルである。

我々はノルマの対象にならない除雪作業を省略し、いきなり雪の上から伐採を開始するのである。夏が来て雪の消えた跡を見ると、一メートルから一・五メートルの立木の残骸が、まるで墓地の墓石のように林立しているのである。中央から作業状況の検査に来ることになると、この一・五メートルの立木をもう一度、地表四五センチのところから切り取るのである。これで検査にはパスするが、切り取った木片は枕木には使えず、まき以外に利用価値はない。

最良の薬はキャベツである

シベリア体験の手記を読むと、多くの人が飢餓の苦

しみを「栄養失調」という言葉で訴えている。講談社の日本語大辞典を見ると、「栄養失調とは、栄養摂取の量的質的不足による病的状態、即ちカロリー不足、たんぱく質欠乏、ビタミン不足などをいう。むくみ、疲労感、貧血などの病状を呈する」となっている。

ビタミン不足のため歯茎から血が出る、足がむくみ脚気のようになり、切り倒した丸太をまたぐにも手で自分の足を持ち上げるようになる。このような症状がある兵士が、「班長殿、足がニガツテ歩けません」と訴えてきた。「足がにがる」とはこの方言が知らないが、この言葉だけは強く印象に残っている。

このような、出血、にがりの治療対策としてとられるのがキャベツの配給である。生のキャベツをまるでウサギのようにガリガリとかじるのである。これで一時的ではあるが苦痛が緩和されるから不思議である。

発狂

シベリアといえば飢餓、酷寒、重労働が代名詞になっている。この三要素が人間の耐える力の限界を超えるとき、人は往々にして発狂するのではなからうか。

私の所属する隊に一等兵の男がいた。東大出身ということでは何となく目置かれていた。その彼が、ある夜突然起き上がり「お母さん、お母さん」と叫び出した。皆が啞然としていると、「僕のお母さんをどこへ隠したの、僕のお母さんを返して」と言いながら入口の所に積んであるまきの山をかき回すのである。

外は零下三〇度の白夜である。手の爪がはげて血が出て痛みを感じないようである。隊長がたまりかねて「だれかあいつをベッドへ連れて行け」と怒鳴り、戦友が慌てて彼を取り押さえた。手を放すとまた、「お母さん、どこへいったの、僕のお母さんを返して」と叫びながら舎内を動き回るのである。兵舎の中は一瞬シーンとなった。皆が故郷の母や妻や子供のことを思い出し、望郷の念にかられ、やるせない気持ちになったものである。

この発狂にヒントを得たわけでもあるまいが、気違いの真似をする者が現れた。風呂場であかで汚れたおけの水を飲んだり、所構わずくそをたれるのである。戦友たちは、あれは気違いの真似をしているのだと冷

やかに見つけたものである。これもシベリアの三重苦から逃れようとする人間の哀れなあがきであろう。

女軍医の無知に泣く

タボール（おの）で足を切った、熱が三九度ある、体がむくんでいる、そして腕や尻の皮をつまんで皮膚がたるんでいるなど、目で確認できる現象だけを病氣と診断するのである。

神経痛、微熱、体のだるさなど外形に現れない徴候は病氣と認定しないで、作業の苦しさから逃れようとするサボタージュと疑うのである。シベリア抑留中の死亡の原因として、飢餓や寒さや栄養失調が誇張されているが、女軍医の無知に泣かされ、命を失った者がいることを忘れてはならないと思う。

シベリアのグルメ

冬のつらさを一気に取り返すかのように、シベリアの夏はいろいろなものをプレゼントしてくれる。

◎早々と春を告げるユリの芽を見つけて掘り返し、球根を取り出し焼いて食べる。

◎ワラビはじゅうたんのように密生している。夢中

で摘んでいるうちに密林に深入りして道に迷い、逃亡と間違えられた兵士もいた。

◎シベリアのキノコの群生は壮観である。やぶの下でヒマワリの花のような大輪の傘や赤や黄の原色で飾り立て、我々を誘惑する。綺麗な花には刺があるのとえのとおり、ケバケバしい色をしたキノコは猛毒を持っている。この毒キノコの陰に隠れるように肩を寄せあっているシメジが我々を歓迎してくれる。焼いてよし、煮てよしである。

◎白樺の木の幹にタポールで傷をつけ、その切り傷から流れる樹液を飯ごうのふたに取って飲むのである。ほんのりと甘く、母親の乳房の香りを感じたものである。

◎馬は本能的に毒草を見分ける能力を持っているという。馬が食べる草は安全、馬が避けるものは毒草といわれているが、我々の周囲には馬がいないので野草には憶病であった。

◎ゲテモノ食いという言葉がある。私がシベリアで体験したゲテモノには犬とドブネズミがある。ソ連人

の作業主任の犬をじゅばん、袴下と交換して、山中に連れ込み料理して食ったのであるが、臭みがあり、肉は固くおいしくはなかった。私は殺害の現場に立ち会ったので、胸がむかつき食欲が起こらなかった。夏の湿原地帯には丸々と太った体長二五センチくらいのドブネズミが生息している。これを捕らえて煮て食べるのであるが、セピア色をしたスープも臭みがなく、肉も柔らかく犬より食べやすかった。シベリアでは、食物は焼けば何でもおいしく食べられること、味つけは岩塩があれば砂糖がなくても十分であることを体験した。

【執筆者の紹介】

現住所 東京都荒川区南千住七―二―二一九〇一
神家氏は、大正十一年二月十日、大分県臼杵町福良で生まれ、昭和十八年九月、明治大学を卒業（戦時特例による繰上卒業）し、満州興行銀行（北安支店）に入社された。

昭和十九年五月一日応召、満州第一八九四部隊に入

隊。昭和二十年七月一日、関東軍工兵幹部教育隊（満州二八九部隊）に甲種幹部候補生として入隊。昭和二十年八月終戦を迎え、入ソ、抑留生活を送ることとなり、昭和二十二年七月、帰国（舞鶴上陸）された。

復員後、昭和二十二年八月、日本醸造化学株に入社されたが同二十三年退社、同年熊本財務局に奉職。昭和五十二年退職（五十五歳）まで勤務されたが、その後電気関係、証券関係の役員として平成二年まで現役として専門分野で活躍。さらに、平成二年二月より平成三年末までは財団法人強制抑留者協会の事務局員として執務されたが、爾後、悠々自適の生活を送り現在に至っておられる。

現在は健康に恵まれ、趣味の釣り、囲碁教室、英会話教室、長寿大学などのカルチャー講座の受講、さらに関係諸団体における各種行事への参加と、多方面にわたり日々の生活の充実をはかっておられる。

（東京都 小池 孝男）